

## 【研究報告】

## 地域住民への訪問実習における学生の体験記述の特徴

## —基礎看護学実習Ⅰの実習記録の分析から—

平 木 民 子\*<sup>1</sup>, 大 本 眞由美\*<sup>2</sup>

## 【要 旨】

本研究目的は、「基礎看護学実習Ⅰ」の実習記録の分析を通して、学生がどのように実習体験を記述して学びを深めていくのか、その特徴を明らかにして今後の実習指導を検討するための一資料を得ることを目的とする。日本赤十字広島看護大学1回生141名のうち、研究の同意が得られた77名の学生の実習記録を対象とした。それを質的に分析した結果、体験記述の特徴は次の5つに分類できた。体験全体の客観的な記述から考察を中心にした記述が見られた<体験の考察中心記述>、自分が捉えた対象者像を中心に記述していた<対象者像描写中心記述>、対象者が語る体験談の内容に対する記述考察が主であった<話題内容中心記述>、対象者の話の内容や実習体験に対する印象や感想を主に記述している<体験の印象・感想中心記述>、実習体験の中から関係の振り返りや自己の反省を中心とした考察記述が主であった<自己反省中心記述>であった。

【キーワード】看護学生、看護学実習、実習記録

## はじめに

21世紀初頭の今日は、医療の高度化、少子高齢化、疾病構造の変化に伴い、多くの国民が自分らしく健康に生きる方法や知恵を模索し始めた時代と言えよう。このために、高度な専門的能力と人間的な成熟性を兼ね備えた看護職の育成を目的として看護系大学が急激に増設された。そのような状況の中で平成12年に開学した日本赤十字広島看護大学では、ヒューマン・ケアリングを教育理念の核として、人道的な価値や使命感を基に、かけがえのない個人の自己実現をもたらすような関わりができ、なおかつ看護者自身も成長するような看護実践能力の育成を主眼としている。この教育目標を達成するためには、教育課程の中でもとりわけ看護学実習の充実が求められる。また実習場の開発については、従来の規則に定められた医療施設や保健所のみにとどまらず教育目標に沿って自由な発想で開発することが望ましいとされている（大学基準協会、1995）。生活体験や看護体験が乏しい1年次前期の看護学生にとっては、高度な医療施設において多様な問題を抱えた入院患者へのケア実践を通して看護を学ぶことが困難

であると思われる。そこで病院実習の前に、地域で暮らす人と直接関わって人間や看護に対する関心を得る契機となる体験が必要であると考え、1年次9月末に大学周辺の地域で暮らす高齢者を訪問する実習を試みた。しかしながら、教員が全ての学生の訪問に付き添うことが不可能なため、学生が訪問体験を振り返りながら対象者理解を深めていくための実習記録の指導を中心とした。

看護学実習の意義は学生が実践を理論と統合することにあり、その指導にあたる教員は、個々の学生の体験を把握し、その中から学生の学習課題を発見しながら、学生が主体的に課題に取り組めるように関わらなければならない。したがって実習記録の指導では、学生が自分の体験を吟味して看護の学びとなるように導くことが重要である。平成9年のカリキュラム改正を契機に、各看護教育機関が多様な施設を基礎看護学実習の場として試みておりその成果が報告されているが（外村、赤塚、2001；吉岡、片岡、2000）、基礎看護学で地域住民を訪問実習した報告はなく、またいずれの報告も実習終了後の学生を対象にしたアンケート調査による到達度をみているため、具体的な記録指導への示唆を得るまでには

\*1 日本赤十字広島看護大学 hiraki@jrchen.ac.jp

\*2 日本赤十字広島看護大学

表1 基礎看護学実習Ⅰについて

**実習目的**

地域で生活している人との直接的な関わりを通して、人間・環境・健康について理解を深め、さらに、その体験を通して人間や看護に対する関心を深める。

**実習目標**

1. 対象者を生活者として把握し、現時点での対象者像をとらえる。
  - 1) 対象者の日常生活や環境を把握する。
  - 2) 対象者の家族や社会における役割や関係を知る。
  - 3) 対象者のもつ生活習慣、考え方、価値観等を知る。
  - 4) 対象者の健康状態や健康に対する考え方を知る。
  - 5) 既習の知識を用いて、対象者の言動や状況を理解する。
2. 対象者に積極的な関心をもつ。
  - 1) 対象者を1人の人間として尊重し接する。
  - 2) 対象者をより深く知るために対象者の言動の意味に注目する。
  - 3) 先入観をもつことなく対象者をとらえる。
  - 4) 対象者の体験について共に感じ考える。
3. 対象者との関わりについて考える。
  - 1) 自分の伝えたいことを対象者に表現する。
  - 2) 対象者の反応をとらえながら関わる。
  - 3) 自分の関わり方を振り返る。
4. 体験したことを吟味し言語化する。
  - 1) 自分がとらえた事実、感じたこと、後で考えたことを区別しながら記述する。
  - 2) 自分が注目したことについて客観的に記述する。
  - 3) 自分の体験を他者に伝達し、意見交換する。
  - 4) 体験からの学びをまとめ、目標達成度や今後の課題を明確にする。

**実習方法**

実習期間は1年次9月末の1週間である。事前に、大学から地域の老人会を通して実習協力の承諾が得られた対象者個人のご自宅へ学生2人ペアで1時間程度の訪問を2回行う。その体験を実習記録に記述し個人指導を受ける。また毎日1回、指導担当教員とグループの学生とでカンファレンスを行う。最終日には、全体で体験発表会を行う。

時 刻	対象者の言動や状況	その場で感じ考えたこと	後で振り返って考察したこと

図1 日々の実習記録様式

至っていない。

そこで本研究では、本学1回生の「基礎看護学実習Ⅰ」の実習記録を分析し、学生が自己の体験をどのように記述して対象者理解を深め看護の学びとしていくのか、その特徴を浮き彫りにすることを目的とする。そしてその結果を基に、訪問体験を記述して考察するという方法によって、今回設定した実習目標を期待することが可能なかどうか、また学生の学びをより深めるには、教員は実習記録のどこに着眼して関わるべきなのかを検討することが本研究の意義である。

**研 究 方 法****1. 研究対象****1) データ収集の手順**

本研究計画書を基礎看護学会議に提出して研究の了承を得た。さらに、実習指導に関わる教員にも研究目的と方法を記した文書を配布して同意を得た。そして本学の1回生141名に対して、実習開始前のオリエンテーション時に、学生に研究の主旨と個人成績には関係がないことと、研究の途中で個人名が特定されないプライバシーの保障を書いた協力依頼文

表2 実習体験の記述特徴の分類 (77ケース)

記録内容 記述特徴	1 日 目		
	状 況 記 述	感 じ 考 え	考 察
体験の考察 中心 (13ケース)	「話の内容+会話のやりとり+状況+表情+雰囲気」	「対象者の言動に対する感心・感動+人物の印象・解釈・推論」 「自己と対象者との見方や考え方の違いからの疑問」	「生じた疑問の探究」 (文献で調べる、考察する) 「対象者の言動の意図、意味の考察」 「情報を統合して対象者理解の考察」
対象者像描写 中心 (28ケース)	「話の内容の詳細」 または「話の内容の要約」	「対象者の言動に対する感心・感動」 「表情+雰囲気+人物像の解釈・推論」	「情報を関連付けて対象者像の解釈、推論」 「関係の振り返りと反省」 「対象者の印象+感想」
対象者の話題 内容中心 (9ケース)	「会話のやりとり+状況記述」または「話の内容の詳細」	「対象者の体験を共に感じ考える」 「表情+雰囲気+人物像の解釈・推論」	「対象者の体験を考察」 「対象者の話題内容に対する解釈」 「関係の振り返りと反省」
体験の感想・ 印象中心 (17ケース)	「話の内容の要約」 または「話の内容の箇条書き」	「対象者の言動に対する感心・感動」 「対象者の印象」	「対象者の言動に対する印象」 「自己の言動に対する反省」
自己反省中心 (10ケース)	「話の内容の要約」 または「会話のやりとり+状況」	「対象者の言動に対する感心・感動、印象」 「自己の言動に対する反省、戸惑い」	「自己の関わり方に対する反省と課題」
記録内容 記述特徴	2 日 目		
	状 況 記 述	感 じ 考 え	考 察
体験の考察 中心 (13ケース)	「話の内容+会話のやりとり+状況+表情+雰囲気」 「前回訪問で関心をもった内容を問いかける」	「対象者に対する尊敬」 「感情移入+体験の客観的な記述」 「対象者の体験の意味づけ」	「既存の情報を統合して対象者像の描写」 「疑問を探究して対象者像の把握」 「関係性の考察をして対象者像の把握」
対象者像描写 中心 (28ケース)	「話の内容の詳細」 「会話のやりとり+状況」	「対象者の言動に対する感動」 「表情+雰囲気+人物像の解釈、推論」	「対象者像の解釈、推論」 「関係の振り返り」
対象者の話題 内容中心 (9ケース)	「会話のやりとり+状況」または「話の内容の詳細」	「対象者の言動に対する感心・感動」 「対象者の印象」	「話題内容に対する考察(死とは、看護とは、病気とはなど)」 「対象者に対する尊敬、感銘」
体験の感想・ 印象中心 (17ケース)	「話の内容の要約」 または「話の内容の箇条書き」 または「話の内容の詳細」	「自己の言動に対する反省」 「対象者の話題に対する感想、印象、解釈」	「体験の感想、印象」 「対象者の解釈」
自己反省中心 (10ケース)	「会話のやりとり+話の内容の詳細」	「関係を振り返っての安堵感」 「自己の言動に対する反省、戸惑い」	「関係性や会話の振り返り+自己反省」 「自己のコミュニケーションのあり方」

を配布しておいた。実習評価までの全過程が終了した時点で学生に実習記録を返却し、協力意志のある学生個人が実習記録を研究者に渡して複写をとり返却した。複写の学生名を末梢してID番号を付した。以上の手順を経て、研究の同意が得られた77名の学生の「基礎看護学実習Ⅰ」の実習記録を研究対象とした。

## 2) 基礎看護学実習Ⅰの実習記録様式について

本学の平成12年度の「基礎看護学実習Ⅰ」の目的、目標、方法は、表1の通りである。実習目標の「1. 対象者像を捉える」「2. 対象者に関心をもつ」「3. 対象者との関わりについて考える」を吟味し言語化する目的で、図1のように、「対象者の言動や状況」「その場で感じ考えたこと」「後で振り返って考察したこと」の3つの区分を設けて体験を振り返って記

述し考察できるような記録様式を用いた。

## 2. データ分析方法

本研究は、学生がどのように体験を記述考察しながら学びを深めていくのかという特徴を実習記録の記述から浮き彫りにするため、質的研究デザインをとり、次の手順で内容分析を行った。①データを「どのような内容」を「どの程度」記述されているのかといった視点でデータを繰り返し読み、文脈単位でコード化していった。②対象者像把握の特徴と、記述の内容と程度を照合させながら、類異性と異質性に沿ってカテゴリー化した。③、①と②を研究者間の意見が一致するまで繰り返しながら、カテゴリーにネーミングしていった。また分析の妥当性については、実習指導に熟練した看護教育学を専門と

する教員の助言を受けた。

### 3. 倫理的配慮

研究結果の記述例に使用したデータを所有する学生に対しては、論文を見せて公表の同意を得た。また、記述例の中に表れる地域住民の方のデータは、分析結果に影響のない範囲でデータ加工して架空の人物になるように記述した。

## 研究結果

### 1. 対象者との会話内容

77ケースは、実習目標1に沿って、いずれも対象者の生活や健康や価値観を把握するために「一日の過ごし方」「趣味や地域の活動」「健康状態」「健康のために工夫していること」「家族の様子」「周辺環境について」などをきっかけにして会話をしていた。対象者によっては、「昔の仕事」「闘病体験」「戦争体験」「看病体験」などの人生経験を詳しく語っているケースもあった。さらに、現代の「若者」「教育」「政治」「人間関係」「人生」「病や死」に対する対象者の考えを語る内容も見られた。そしてどのケースも、対象者の生活や人生に対して学生の「感心・感動」を表す記述が見られた。しかし、その記述の特徴については、「話の内容、会話のやりとり、状況、雰囲気」といったその場の状況全て含まれているケースもあれば、「話の内容の詳細」「話の内容の箇条書き」「話の内容の要約」「会話のやりとり、状況」など、その場の状況全体の中の部分と見られる記述をしているケースもあった。

### 2. 実習体験の記述の特徴

2日間の記録のうち主に「考察」の記述特徴に基づいて77ケースを分類すると、表2に示すような特徴に分けられた。体験した内容を客観的に記述し、その内容から対象者理解に繋がる考察が多く見られた【体験の考察中心記述】、自分が捉えた対象者の描写とその解釈の記述を展開していた【対象者像描写中心記述】、対象者が語る経験談や話題内容に感心して話題内容の考察の記述を中心にしていた【対象者の話題内容中心記述】、体験に関する印象や感想を中心に記述している【体験の印象・感想中心記述】、関係性の振り返りや自分のコミュニケーションのあり方を反省する記述が多い【自己反省中心記述】であった。5つの分類間の2日間に渡る記述経過の比較分析をすると、「状況記述」「感じ考え」「考察」の記述の内容と深さにも違いがあることが明らかと

なった。次に各分類別に具体的に述べる。

#### 1) 体験の考察中心記述

対象者との会話内容とその場の状況の両方が記述され、さらにその場で、自分が感じたことの解釈や推論をして、その体験を後で振り返り考察し、既存の情報を統合して対象者把握をしていたケースが13ケースあった。以下に典型的事例を示す。

【ケース17】1日目[状況]: 地域サークルの会長をしていると言ったので「忙しいでしょうね」と聞くと「ただの名前だけの会長ですよ」と笑いながら答えた。また「こんなところまでは金をかけられないからね」と自分で庭の手入れしていると自慢気に答えた。また仲間との触れ合いを楽しそうに話した。5年前から疲れを感じるなど体力の低下を気にしていた。「だからこそ身体を使っていないとだめなんだ」と前向きな考えであった。→[感じ考え]: 答え方が謙遜した様子だから少し照れているのだろうか。仲間との触れ合いがとても楽しそうだ。年齢と共に訪れる体力の低下を仕方がないことと受け止めながらも自らその衰えを防ぐために積極的に取り組んでいると語る姿がとても生き生きしている。→[考察]: 会長という中心的存在としての役割に誇りをもち、現在も社会に参加していることが充実感をもたらすと考える。Yさんにとっては、趣味を通して物事への関心が深まり、また同じ興味をもつ仲間と触れ合うことで常に社会と関わりをもつことが精神的健康につながっている。年齢から言えば老年期であるが、その区分に当てはめるのではなくその人の人生の過程で培われた内面的な考え方を踏まえて応じていくことが大切だとカンファレンスで話したことを納得した。2日目[状況]: 招かれた部屋に入るとYさんが席に着き続いて奥さんが隣に座った。「今日は散歩はしないのですか」と問いかけると、奥さんがYさんに向かって「あなた達が来ることがうれしいみたいで、今日は先に済ませちゃったのよね」と言うとYさんがうなずかれた。その後、趣味の話や近所の様子を詳しく楽しそうに話して下さった。→[感じ考え]: 今日は2日目ですぐに慣れて緊張もなくなった。訪問を心待ちにしてくれたので大変うれしく感じた。Yさんも1日目より表情が明るく積極的に話しかけている。素敵なお夫婦だな。→[考察]: このご夫婦から伝わるエネルギーに圧倒されるような感じがする。それが何なのかと考えた。訪問前に、地域で生活している高

齢者は、孤独や不安や心配が絶えないというイメージをもっていた。それとYさんは全く違っていたのである。また、2回目の訪問でYさんが積極的になっていたのは、互いに相手を知り話題を共有することで徐々に安心感や親密さが増したのだろう。私たちにいろいろ教えることで、自分のもっている知識が人の役に立ったという満足感をYさんは感じたのだろう。会長の仕事を誇りにするYさんの姿と一致する。

学生と対象者との会話場面では、『忙しいでしょね』と言うと『名前だけの会長ですよ』と笑いながら答えた。』といったような、自分と対象者との「会話のやりとり」が見られる。また『笑いながら』『楽しそうに』『自慢気に』など対象者の「表情」や「雰囲気」が伝わってくるような記述があった。さらに、『Yさんが席に着き続いて奥さんが座った』など、その場の状況を説明する記述も含まれていた。つまり、自分を含めたそこにいる人々の様子が客観的に描かれ、場の文脈や構図が把握されていたのである。そして、その場で学生は、『うれしく感じた』『活き活きしている』『素敵なご夫婦だ』などの「感心・感動」や「印象」を抱いていた。しかしそれに終わらずに、『少し照れているのか』などの「人物の印象や解釈」を記述しており、さらに『自らの衰えを受け止めながらも積極的に取り組んでいる』といった「解釈や推論」などの思考を表わす記述も見られた。そして、考察に至っては、『役割に誇りと充実感をもつ』『社会参加への充実』『物事への関心を深める』『仲間との触れ合いは精神的健康』といったように、会長をすることや趣味に取り組むことが、この対象者にとってどのような意味があるのかを考えた結果を記述していた。また、『その人の人生で培われた内面的な考えを踏まえる』というカンファレンスでの学びを自分の体験と統合させて考察し、対象者の理解を深めるような記述の特徴があった。さらに、『伝わるエネルギーが何なのか』といった疑問が学生の中に生じ、それを考えてみるといった「生じた疑問の探究」がなされていた。探究の結果、その原因は『自分が訪問前に抱いていたイメージと対象者との違いであった』と考察して対象者の理解につなげていた。他のケースにも、体験から生じた「疑問を探究」する記述が見られた。自分と対象者との考え方や価値観の違い、自分の描いていた高齢者との違いなど、学生は自分と対象者の相違点を感じていた。そしてそれを、何なのだろうか、なぜだろうかという疑問に置き換えて、「老人」「ストレス」「慢性疾患」など文献を使って理論的に

追求して対象者の理解を深めるケースもあった。そして、このケースが2日目の訪問で、対象者に趣味の散歩の話題を投げかけたように、1日目の体験から自分に関心をもったことを手がかりとして2日目の会話を導き話題を広げ、対象者に具体的な質問をする記述が見られた。また、学生は2日間の互いの関係性に注目して、関係が発展したことを『うれしい』と喜びながらも、その意味を『互いに共有することで親密さが増した』と客観的に捉えて考察していた。そして、『私達にいろいろ教えるYさん』にうれしいと感じるだけでなく、『自分の知識が人の役に立った満足感』といったように、自分に向ける対象者の言動を意味づけ、関係性を振り返って対象者理解を深めていた。つまり、今ここで自分と相互作用している対象者像と、サークルの会長としての誇りと充実を感じる対象者像が一致したと考察している。このように「既存の情報を統合」し、「関係性の考察」をして対象者像把握をしている記述が見られたのである。

## 2) 対象者像描写中心記述

2日間にわたって、話題内容から対象者像の解釈や推論を導くような記述が多く見られ、28ケースと最も多く占めていた。次に典型事例を示す。

【ケース66】1日目【状況】：絵画、陶芸などたくさんさんの趣味をもっていて、その場で人と話すことも楽しいそうだ。作品は家族や友人に平等にプレゼントしている。陶芸クラブを辞める時も人数分のお礼をもって挨拶した。今でも買い物先でよく声をかけてくれる。孫みんなに手紙を書いている。夫が亡くなってから話好きになったそうだ。女手一つで6人の子どもを育てた。→[感じ考え]：平等に接することを大事にしている人なんだ。夫の死がきっかけに前向きな性格になったんだ。→[考察]：どの人にも平等にという考えがあるから、人から信頼や好意を持たれている。他人を惹きつける力がある人だ。夫の死をきっかけに話好きになって趣味をもち充実した生活を送っている。→2日目【状況】：同居している嫁とうまくやっている。お互いに気を使い互いに気に入らないことがあっても口に出さないそうだ。今日は陶芸の作品も見せてもらった。「なぜ多くのことに興味をもてるのか」と聞くと、「手先を動かすのが好きだし、やろうと思えば何だってできる」と活き活きと言われた。→[感じ考え]：互いの気遣いが大事なんだ。80歳代でこんなに前向きなんてすごいと思った。→[考察]：プライベートなこと

まで話してくれた。私達に心を開いてくれたのかもしれない。平等という考えには、気遣いもあるのだとわかった。やろうと思えば何だってできるという考えだから、積極的にになれるのだろう。

ケースによって具体性や記述量の差があるが、このケースが示すように状況記述の欄には、対象者が話す内容の記述で占められていた。しかし2日目の状況記述では、『なぜ多くのことに興味をもてるのかと聞くと手先を動かすのが好きだと答えた』などの「会話のやりとり」が出てきたり、あるいは『生き活きと』といったような「表情」や「雰囲気」の記述が2日目に見られるケースも見られた。そして、感じ考えの記述の欄には、2日間ともに、『平等を大事にしている人』『前向きな性格』といった「対象者像の解釈」や、『80歳なのにすごい』といった対象者に対する「感心・感動」を表わす記述が多く見られた。そして考察の欄では、1日目『平等という考えが人から信頼や好意をもたれている』2日目『平等の考えには気遣いもある』といったように、既存の情報を関連付けて「対象者像の解釈や推論」を進めて対象者像を徐々に把握していく記述をしていた。また『プライベートなことまで話してくれた、心を開いてくれたのかもしれない』といったような対象者と自分との「関係の振り返り」の記述も見られた。しかしそれを客観的に意味づけたり、対象者像と関連づけた考察の記述はなく、対象者像の描写を中心に記述していた。

### 3) 対象者の話題内容中心記述

対象者との会話内容の詳細な記述が豊富に記され、その話題内容に対して深く感心感動して2日間を通して話題内容の考察を中心に記述していたのが、9ケースであった。その中の一部分を以下に示す。

【ケース77】1日目[事実]:「この前急に胸が苦しくなって救急車で運ばれて入院したのよ」と言われた。「入院生活はどうでしたか」と聞くと、「やっぱり家がいい、主人や家のことが気になるしね」と言われた。→[感じ考え]:女性が家を空けるのは心配ごとが増え戸惑うのだと思った。家は自分のペースで安心して生活できる場だと思った。→[考察]:療養に専念できる環境を整えるには、その人の社会の役割も理解しないといけない。→2日目[事実]:「入院中の話を聞かせて下さい」と投げかけた。「心電図撮りながら徐々にリハビリしたのよ。早く電話のところまで歩けるようになりたいから、ふらふらしていても看護婦さんの前ではちゃんと

していたわ」→[感じ考え]:大丈夫なところを見せて早く電話をかけたかったんだ。→[考察]:早く退院したいために無理をすることもある。看護師は患者さんが無理をしていないか気使い、あせらずに療養するように伝えなければならぬ。またあせる原因を知ること大事だ。この話は今後に活かしたい。

状況記述の欄には、対象者の体験談が詳細に記述されていた。そして、『入院はどうでしたか』『話を聞かせて下さい』などの学生からの問いかけと、それに対する具体的な対象者の応えの「会話のやりとり」も詳細に記述されていた。学生はその場で、対象者の体験や話題内容に対して『戸惑うのだ』『家は安心できる』『早く電話したかったんだ』など、「対象者の体験を共に感じ考える」ような記述が見られた。そして、1日目の考察では、『療養に専念できる環境作り』『看護者の関わり方』など、今後の看護に活かすための「話題内容に対する考察」が記述されていた。他のケースでは、対象者が語る戦争体験や看病体験に対して、『苦勞しているのに謙虚な方だ』『嫌な思いをしても相手を責めない立派な人』といったような「対象者に対する尊敬や感銘」を中心に記述していた。そして、2日目の考察でも『看護師は患者さんが無理をしていないかあせらないように気を使うべき』といった対象者の提供する話題内容に対する考察が見られた。

### 4) 体験の感想・印象中心記述

対象者が話す話題内容に対する感想や対象者の印象を中心に記述しているケースが17であった。

【ケース31】1日目[状況]:「今の若者は自由や権利ばかり主張して責任から逃げている。小さい頃の教育が大事。」と真面目に笑顔で話して下さった。「仲が良い友達とは20年の付き合いで、やっぱり友達は大事よ」と何度も繰り返された。→[感じ考え]:中学の先生と同じ事を言われて感動した。少し年代の差も感じた。私も友達を大事にしようと思った。→[考察]:大人の人は自分達と比較しながら私達を見ているのだろう。20年間も続いているのは友人を思いやっているのだろう。→2日目[状況]:「主人はすごく理解のある人で、私はどこにでも旅行に行ける」と奥さんが言う、「お互いあまり干渉せずに大切にしている」と笑って答えられた。→[感じ考え]:本当に心からご主人に感謝しているんだな。笑顔が素敵だった。→[考察]:2人は本当に良い関係なんだな。いつまでも新婚の気持ちで生活しているようだ。

状況記述の欄には、このケースが示すような「話の内容の要約」や、あるいは「話の内容の箇条書き」といったように、記述が簡潔であるという特徴をもっていた。対象者と学生の会話のやりとりやその場の雰囲気を示すような記述が加わるのはごくわずかであった。あるいは『自分は聞いているばかりだった』と「自己の言動の反省」が書かれているケースもあった。そして、感じ考えの欄には、『感動した』『反省した』『感謝しているんだ』『笑顔が素敵だ』などの、「対象者の言動に対する感心・感動や印象」が多く占めていた。考察の欄では、『友達を思っているのだろう』『本当に良い関係なんだ』といったような「対象者の言動に対する印象・感想」「対象者の解釈」が多く記述されていた。また『年代の差を感じた』という「体験の印象」や、『大人は自分達と比較しながら私達を見ている』といった「解釈」を記述しているケースもわずかに見られた。しかし、対象者の言動を意味づけたり、関係性を振り返って対象者像を考察する記述は見られなかった。

#### 5) 自己反省中心記述

状況記述の欄で対象者の話題内容が詳細に記述されている場合でも、考察の欄では、その場における自分のあり方や関係性の振り返りが記されていた。以下に示すような自分を反省する特徴をもつケースが10ケースであった。

【ケース46】1日目[状況]:毎週釣りに行っている。お酒と煙草が大好き。でも20年前に糖尿病と言われ最近では身体に気をつけ始め、今はインスリンを打ちに病院へ行っている。→[感じ考え]:お酒が好きだと聞いて、お父さんのことを話したらと思っていたら、話がどんどん変わって、突っ込めなくて苦しかった。沈黙が続いている時、話題を探してくれているようで辛かった。→[考察]:天気や季節のことから話し始めてもいいと思う。糖尿病のことを調べて今度は聞いてみようと思う。→2日目[事実]:糖尿病について聞く「糖尿病は遺伝かなと思った程度であまり健康の考え方は変わっていない。定年後は薬をインスリンに変えて運動している。」→[感じ考え]:とにかく話ができてほっとした。あまり気を使ってないのに驚いた。生きがいについて聞いてみたら良かった。→[考察]:糖尿病に興味をもっているとわかってくれたようで沢山話してくれて参考になった。あまり深く聞くことはできなかったが話が盛り上がって良かった。

状況記述の欄では、対象者の話の内容の要約や会

話のやりとりが記述されていた。その場で感じ考えた欄では、『突っ込めなくて苦しかった』『辛かった』といった「自己の言動に対する反省や戸惑い」の記述が見られた。そして1日目の考察では『天気の話を始めよう』『今度は調べて聞いてみよう』といったような「自己の関わりに対する反省と次回の課題」が記されていた。それを手がかりにして、2日目の状況記述の欄には、糖尿病の話題が広がる様子が見られた。つまり、「会話のやりとり、話の内容の詳細」といった会話の発展を示すような記述になったのである。しかし、2日目に発展したにも関わらず、その場で感じ考えた欄には、『ほっとした』といった「関係を振り返っての安堵感」や、『生きがいについて聞けば良かった』といった「自己の言動に対する反省」が記述されていた。そして2日目の考察では、発展した会話内容に対する考察や対象者像把握の記述はなく、『あまり深く聞けなかったが盛り上がってよかった』という「自己反省」が中心に記述されていた。他のケースにおいても、『自分は話が下手』『もっとスムーズに会話できなければ』といったようなコミュニケーションのあり方と自分のあるべき姿を考察するという特徴をもっていた。

## 考 察

本研究からは、地域住民への訪問実習における学生の体験記述の特徴を分析分類した結果、どのケースも実習目標に基づいた記述がされていることが示唆された。そして、分類された中でも「体験の考察中心記述」が最も実習目標を達成し、対象者像を深く把握できることが明らかとなった。そこで、「対象者理解を深める記述要因」と「体験の考察を促す実習指導への示唆」の2点から考察する。

### 1. 対象者理解を深める記述要因

「体験の考察中心記述」の特徴の第1点目は、訪問場面の状況記述が、対象者と自分との会話内容、その場の雰囲気、対象者の表情など状況全体が網羅されていることであった。つまり体験を深く考察するためには、自分と対象者が会話のやりとりをする中で、その話題の内容を把握すると同時に、その場の状況をも把握できなければならないことを示す。この能力は、相川（1996）が言う社会的スキルに近いものではないだろうか。すなわち、他者との関係や相互作用の技能に必要とされる対人反応の知覚や解釈や感情の生起が反映していると思われる。つまりそういった社会的スキルの技能を学生がもちあわ

せていて、それを訪問場面に発揮した結果と思われる。そして相互作用の中で、学生は対象者に対する感情を抱きながら、同時に考えることができ、その体験を客観的に記述することができていた。感情移入だけではなく共感する能力が看護には必要であると言われるが（長谷川, 1993）、この訪問場面の記述からも、学生の感情の生起とそれを客観視する能力が伺える。そしてそれが対象者理解を深めるための要因であることが推測された。

第2点目の特徴は、1日目に自分が関心をもった話題を2日目に投げかけて関係が発展していたことである。そして対象者との関係性の変化を客観的に振り返って、その反省に終わることなく、関係の中で現われた対象者の特性をこれまで得た対象者像と統合して対象者理解を深めるような考察が見られた。これは見藤（1987）がいう、客観的に相手を対象化して一方的に把握する対象把握とは異なった、自分との関係の中でわかっていこうとする看護における人間理解に近い特徴と言える。すなわち、今回の訪問実習は看護実践の場面ではないが、看護に必要とされる人間理解の訓練の場になり得ることも示唆された。

さらに、自分とは異なる対象者の価値や考えに気づき、その疑問を探究することが第3点目の特徴であった。そして生じた疑問を文献や自己の思考で探究して、その結果をさらに実際の対象者理解に活用していた。病院実習での看護学生の思考過程のパターン明らかにした研究においても、学生が「なぜだろう」「何が起きているのか」と疑問をもち、疑問解決のための確認を行い、多面的な視点で複数の情報を統合した仮説を導いて、患者に意図的に関わるという特徴を明らかにしていた（坂口、守田、1998）。したがって、訪問実習で体験を考察して対象者理解を深めるためには、看護ケアを行う病院実習と同じように、探究の手がかりを得るための疑問が学生の中で生じることと、疑問を解決するための探究ができることと、既存の情報を統合するという思考力が重要な鍵を握っていると推測される。

以上の3点の特徴は、いずれも看護実践に必要な対象理解のための能力であり、今回の実習目標達成を促すための重要な要因であることが示唆された。これを手がかりとして、今後、実習要項の中の目標表現や実習記録記載方法や指導要領など再検討が必要である。また、今回の基礎看護学実習Ⅰは1年次前期であるため、以上のような能力を身につける学習が充分積まれていない時期であるため、実習の成果は主に学生のこれまでの生活経験の中で培った資

質や能力と、教員の指導が大きく影響していると考えられる。今後は、どのような指導方法が対象者理解を深めるような記述に発展させることが可能なのかを検討する必要がある。

## 2. 体験の考察を深める実習指導への示唆

中西（1983）は、教員は学生の記録の中から学生の感性、情緒、認知の構造などを発見して指導の方針や方向性を決定する判断材料にすると述べている。ここでは「体験の考察中心記述」以外の分類された4つの特徴について、実習目標と照合しながら今後の指導への示唆を検討したい。

「対象者像描写中心記述」は、実習目標を概ね達成していたが、下位目標の中の「既習の知識を用いて対象者の言動や状況を理解する」「対象者をより深く知るために対象者の言動の意味に注目する」の2点に關係する記述が少なく、体験を文献や思考で考察し意味づけるといった過程が不足していた。また、学生の素直な感情の表現記述が主で記述内容の深さが不足していた「体験の感想・印象中心記述」は、下位目標の「自分が注目したことについて客観的に記述する」といった課題が困難であると考えられる。これらの考察や客観的な記述の不足は、分析と総合、あるいは演繹と帰納といった事実と知識の統合に関する思考が弱いことが考えられる。しかしながら、思考の問題か感性の問題かあるいは緊張感のためなのか、記録上だけでは判断決定できないため、教員は学生の体験場面を見ることができない実習方法であるがゆえに、学生とよく話し合って体験を共有しながら記述を促す関わりをする必要があるだろう。また、今回の実習目的は「人間・環境・健康について理解を深め、さらに人間や看護に対する関心を深める」であったため、考察する視点が明確に示されなかったことも記述を困難にした要因とも考えられる。さらに、対象者と関係を深めながら対象理解も深まっていくといった看護における対象理解の特徴を理解するための実習前の講義や演習の内容との関連性を今後検討する必要がある。

「対象者の話題内容中心記述」では、下位目標「対象者の体験について共に感じ考える」を中心に展開しており、「現時点での対象者像を捉える」の目標に着眼することを見失っていた可能性もある。あるいは、学生が対象者の体験談に深く感情移入する傾向の現われとも考えられる。個別指導の際には、学生と再度実習目標の確認を行い、また、対象者像把握の視点に着眼できるように学生と体験を振り返りながら吟味する指導が必要である。



「自己反省中心記述」は、実習目標「3. 対象者との関わりについて考える」を中心に展開していた。看護学生は、1人の援助者としてのアイデンティティの確立をしなければならない青年期の発達課題をもつ時期であり、そこには自負心や自信のなさといった成長の痛みを伴うと言われる（中西, 1983）。この訪問実習では、自分とは世代の異なった対象者と初めて関わるため、学生の中に緊張や不安があったと思われる。そのために、考察の着眼点に対象者把握ではなく自己のあり方に中心が置かれていたと推測される。学生の不安や緊張を取り除いて、冷静に体験を吟味しながら対象者理解に視点が向くような関わりを検討する必要がある。

### 限界と今後の課題

本研究の対象は一部の学生の実習記録であり、本学全ての学生の特徴とすることは限界がある。また、分析した記録は教員の指導を受けたものであるが、それを分析対象にはしていない。今後は、教員の指導、実際の訪問体験などの関連要因を検討していく必要がある。

### 謝 辞

研究に協力して下さいました学生の皆様に心から感謝いたします。本研究は平成12年度日本赤十字広島看護大学共同研究費を受けて実施した。

### 文 献

- 相川充 (1996). 社会的スキルとは何か, 社会的スキルと対人関係. (pp. 6-21), 東京, 誠信書房.
- 長谷川浩 (1993). 共感的看護, 今ここでの出会いと気づき, 東京, 医学書院.
- 看護学教育研究委員会 (1995). 実習指導体制の整備, 看護学教育に関する基準, 41-43, 財団法人, 大学基準協会.
- 外村由美子, 赤塚隆子 (2001). 地域で生活している人を対象にした基礎看護学実習の考察, 看護展望, 26 (3), 105-110.
- 見藤隆子 (1987). 人を育てる看護教育. 医学書院.
- 中西睦子 (1983). 臨床教育論. ー体験からことばへー, 東京, ゆみる出版.
- 坂口千鶴, 守田美奈子, 奥原秀盛, 常盤文枝, 大野和美, 松本智美, 黒田裕子 (1998). 臨地実習における看護学生の思考過程の明確化 (第2報) -

- 学生の思考過程のパターンとその影響要因-. 日本赤十字看護大学紀要, 第12号, 20-33.
- 吉岡一実, 片岡智子, 中西貴美子, 樋廻博重, 石井八重子 (2001). 学生側評価による基礎看護学実習の学習効果, 看護教育, 41 (10), 866-871.

# **On Nursing Students' Clinical Practice in the Local Community: An Analysis of Clinical Reports in Fundamental Nursing**

**Tamiko HIRAKI \* , Mayumi OMOTO \***

**Abstract:**

The purpose of this study is to distinguish how nursing students study people in the local community by examining the students' experience, thereby gaining material to improve clinical teaching.

This study analyzed the clinical reports of 77 students who gave consent to cooperate in this study. Analysis of the data revealed that students' evaluation of their experiences can be classified into five types: 1) those who describe with deep understanding their experiences and the significance of those experiences; 2) those who interpret with understanding their patient's character; 3) those who become absorbed in and describe the topic of conversation; 4) those who describe an impression of their experiences and patient; 5) those who used the situation as an opportunity for self-examination.

**Keywords:**

nursing students, clinical practice, clinical reports

---

\* The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing